

bì yě kuáng juàn hū !
必也狂狷乎！きょうけん
必ずや狂狷か〈子路第十三〉うえだ あつ お
桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄

「狂」という文字から受ける印象はあまり良いものではありません。それは、恐らくこの一字が常軌を逸した行動という意味を伴うからでしょう。しかし常軌を逸した行動をすべて悪と決めつけていいものかどうか、この点は一考を要する所です。では孔子はどう考えていたのでしょうか。『論語』の中には「狂」の文字が何度か出てきます。

「不得中行而与之，必也狂狷乎！(Bù dé zhōng xíng ér yǔ zhī, bì yě kuáng juàn hū!)」中行を得て之に与せざれば、必ずや狂狷か〈子路第十三〉。中庸の徳を備えた仲間を得て、そういう人達と行動を共にするのが理想であることは言うまでもありません。「中行」とは、中庸の徳を身に付けた人。一時の感情とか、個人や特定集団の利害などに左右されることなく、常に冷静な判断と行動力を備えた人のことです。しかし、そんな人が常に身近にいるとは限らない。ましてや孔子の生きた時代は混乱の時代です。そういう人が仮にいたとしても、却って生き辛かったことでしょう。

『論語』の別の所では次のようにも言っています。「中庸之为徳也，其至矣乎！民鮮久矣(Zhōng yōng zhī wéi dé yě, qí zhì yǐ hū! mǐn xiǎn jiǔ yǐ)」(中庸の徳為るや、其れ至れるかな。民に鮮なきこと久し)〈雍也第六〉。中庸の徳は、この上なく素晴らしいものである。しかし、そういう徳を備えた人はすでに少なくなってしまった、と。

では、どういう人たちをあてにすればいいのか、そういう時はむしろ「狂狷」な人を選んだ方がよいのではないかと孔子は教えています。狂狷とは一本気で頑固な人のことです。中庸の徳を備えた人が見当たらなければ、いい加減な妥協をする人より、むしろ一見それとは正反対の、一途で頑固な人の方が良いの

ではないか、というわけです。「必ずや狂狷か」はそういう気持ちを表わしています。

文はさらに続きます。「狂者进取，狷者有所不为也(Kuáng zhě, jìn qǔ, juàn zhě yǒu suǒ bù wéi yě)」(狂者は進んで取り、狷者は為さざる所有り)。狂者には自ら進んで物事に取り組む気質があり、狷者には人にそそのかされたりしない頑固さがあるからだ、と。「進んで取る」とは、傍目を気にすることなく積極的に物事に取り組むこと、「進取の精神」という言葉はここから来ています。時には失敗することもあるが、それを恐れず突き進むこと、俗な言い方をすれば、血の気が多いということです。「狷」とは「狷介不羈」という四字熟語が示すように、人の言いなりにならないことです。悪く言えば頑固で、周囲の空気が読めない。こういう人は、世間から見れば確かに扱いにくい。しかし悪に染まることもない。「為さざる所有り」はそのことを表わしています。付き合いにくい、安心して付き合える人、とも言えます。

晩年、長い旅を終えた孔子は、故郷を目指して、次のように語っています。「归与！归与！吾党之小子狂简，斐然成章(Guī yǔ! guī yǔ! Wú dǎng zhī xiǎo zǐ kuáng jiǎn, fěi rán chéng zhāng)」(帰らんか。帰らんか。吾党の小子は狂簡にして、斐然として章を成す)〈公冶長第五〉。さあ帰ろう。私の故郷の若者たちは血の気が多く粗削りだが、優れた資質を持つ者が、綺羅星のごとく並んで待っている、と。吾党とは孔子の自宅がある村、集落のこと。「小子」とは若者。「斐然として章を成す」とは、美しく居並ぶさまです。狂は「狂狷」の狂に同じ、「簡」は荒削りで未完成なことです。孔子は教育者として、人生最後の望みを「狂」の一字に託していたようです。

(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)